

2026 法語カレンダーについて

令和8年1月14日

今年のカレンダーのテーマは、昨年に続き「宗祖親鸞聖人に遇う」です。淨土真宗のみ教えにふれた先達のお言葉を通して、あらためて出遇っていただきたいとの願いから、法語は選定されました。

表紙：これからが これまでを決める 藤代聰磨

御正忌において述べられた言葉。得度を祝してと添え書きがある。南無阿弥陀仏が私に届いているということは、私を導き、育てる仏さまのはたらきのなかに私はある。そこに、淨土へ生まれ往く人生であることを実感できる。

1月： み教えによって 自分のありのままの相が知らされます 藤田徹文

み教えによって照らし出された、自分のありのままの相とは、自分の「ものさし」が問われて明らかになる、真実の姿。「何があってもあなたを見捨てる事のない私がいます」と言ってくださる仏さまとともに生きる真実の歩み。

2月： 一切衆生の救われる道でなければ自分は救われない 金子大榮

私のどうすることもできない悲しみを、ともに悲しんでくれる方がいるとき、悲しさはなくならなくとも、支え合って生かされていく道が開かれる。迷いのなかにある私を、救わずにおかない、包んで支え、ともに歩もうとしてくださった仏さまの大悲。

3月： 一人の人生であっても決して一人ではなかった 藤澤量正

私たちはときに支え、ときに支えられながら生きていることを、一人で生きているのではない、支え合って生きているといただいてきた。仏さまの大悲に照らされて、仏さまとともに歩む人生を恵まれている私。

4月： 聞法をするということは結局自分を聞くことなのです 仲野良俊

自分の姿が見えてこなければ、人間は助かってみようがありません。仏法を知識として聞くのではなく、仏法に自分自身を聞いていく。そこには、後ずさりしながら、いのちの目的地を知らず、迷いの真っただ中にいる自分の姿がみえてくる。

5月： 信じるということは 聞くほかはない 桐渓順忍

阿弥陀さまのお救いは、一切の条件をつけて、すべてのいのちに届き、絶対に変わらない。人間の力（自力）では往生できない私に、阿弥陀さまから向けられた（他力廻向）南無阿弥陀仏のお救いは、ただただそのまま疑いなくお聞かせ与るばかり。

6月： 人間とは 自分で自分の始末を仕切れぬ者の別名である 高光大船

死の解決あってこそ生の解決もつく、すなわち「自分・人間の解決」を阿弥陀さまのみ教えに問い合わせて解決する。阿弥陀さまが「死んだらどうなるのか」を知らない私に「お浄土に生まれさせ、仮のいのちと成らせる」といのちの行方を知らせ、はたらいてくださる。

7月： 浄土とは違ったものが違いをもったまま調和することができる世界 坂東性純

浄土という世界を知ることで、自分の見方や考え方がいかに誤っているか、自分の住む世界がどれほどあてにならないか、自分がいかに自己中心的であるのかを思い知らされる。違ったものが違いをもったまま調和することができる世界、そのような浄土が、私の住む娑婆世界の問題点を明らかにしてくれる。

8月： 関係ないよう見えて 実はみんな深い関係があるのです 永六輔

見えない関係性に目を向けないと、他に対する慈しみや思いやりの心が生まれてこない。願いがかけられていることも知らずに、「関係ない」と背を向ける、そんな私を放っておかない阿弥陀さま。

9月： 悲しみが「いのち」への 深いめざめとなっている 瓜生津隆真

「死」をどこまでも他人事として、客観的に考えている。他人事であれば「生者必滅は道理、人が死ぬのは当たり前のことだ」と言えるが、それを自分や自分の家族に置き換えて考えてみると、決して「当たり前」では済まされない。「死」を主体的に受け止めてこそ、はじめて「いのち」への深い目覚めの第一歩となる。

10月： 世間的なことでは心の底から満足できない そういうものが人間にある 米沢英雄

私たちはいろいろなものに期待しながら生きている。しかし、その期待はほとんどが裏切られ、期待は憂いへと変わる。期待したものが得られても、それに満足することではなく、新たな期待が湧いてくる。そんな私のために、必ず救うという阿弥陀さまの願いが届けられている。

11月： 如来というのは形ではないのです 声なのです

「なんまんだぶつ」という声なのです 靈山勝海

この私に大いなる安らぎを与えようと、声という形のない姿をもって私に至り届き、聞こえる仏さまに成ることを誓われた。そして今、私がこの人生の中に「なんまんだぶつ」を聞かせていただいている。

12月： わたしは出会った人の数だけ いのちの輝きに出会ってきた 祖父江文宏

「悲しみの前で無力なまま、その人の悲しみに身を添わせる以外にない」人間の理屈を超えたところからはたらきかけてくださるのが阿弥陀如来。阿弥陀さまの光に照らされた無数のいのちの輝き。